

キリスト教主義教育の展開

—キリスト教主義学校における宗教リテラシーのあり方をめぐって

舟 木 讓

本プロジェクトは、「グローバル化」する世界の中で、特に本学においても2014年度に文部科学省による「グローバル人材育成推進事業（全学推進型）」に採択されたことを一つの契機として、様々な文化的・宗教的背景を持った学生への対応が喫緊の課題となったことが契機となっている。これまでも特に中東からの留学生を多く受け入れてきた理工学部では個人的な配慮で、特にムスリム学生への対応が行われたり、西宮上ヶ原キャンパスにおいても、国際連携機構や宗教センターが個別に対応したりしてきた経緯が存在する。そして、今後さらに多様な宗教的背景を有する学生・教職員の増加が予想される中、2015年度、「合理的配慮」という概念の誕生とも関係のある「宗教リテラシー」に関する研究とともに、特に「グローバル化」が進展する世界や高等教育機関における実際的な展開に関してフィールドワーク等を通じてその可能性を探ることを目的として本プロジェクトが発足した。本来は多くの宗教を対象とすべきであるが、二年間と言う限られた期限の中で、今回はイスラームの信仰を有する方たちへの対応に焦点を絞って、具体的な対応への架け橋となることを目的として進めることとなった。

以上の経緯より、に初年度は、イスラームに対する知識を深め整理することと、本学と同じ「キリスト教」に基づいて創立された学校の対応の現状を探り、2年目にそのことを受けて本学での具体的な対応に移ることを目的とした。こうした計画から初年度は、小原克博氏（同志社大学神学部教授）をお招きして「キリスト教とイスラーム教の対話」と題したご講演をいただき、特にイスラームに関

する知識の整理と共にその現状を確認するとともに、本学学生らにこのことを理解する重要性を啓発することとした。イスラームとは直接関係しないが、本学でも実施されている「動物実験」への対応をめぐる、大宮有博氏（本学法学部教授・宗教主事、ご講演時は名古屋学院大学准教授）を招いて、「実験動物感謝式一名古屋学院での実例から」と題したご講演と共に、実際の感謝式の再現を行っていただき、新しい視点からの「宗教リテラシー」の問題提議を行っていただいた。

また、本紀要前号でも報告したように本学で実施されたACUCA（Association of Christian Universities and colleges in Asia）日本委員会（2015.2.24）に出席されたキリスト教主義学校のムスリム学生らへの対応の聞き取りを通じ、本学での可能性を探る情報を得ることができた。

2015年度の活動を通じて、2016年度は本学における「宗教リテラシー」のあり方、特にムスリム学生への対応（具体的には恒常的な「祈りの場」の提供とハラル料理の提供方法）を関係部局との情報交換や、今後の具体的な設備・組織の必要性等についての話し合いを開始することとなった。

そうした取り組みの中で、現在ムスリム学生への「祈りの場」、として一時的に提供している部屋に代わる恒常的な「祈りの場」を本学G号館地下に新たに設置された学生活動のための貸し教室を利用する可能性について話し合いを続けている。また「実験動物」に対する「感謝式」的な式典の実施に関しては、前川裕RCC主任研究員（本学理工学部専任講師・宗教主事）らが当該学部との調整にあたり、本学らしいあり方を模索している。

一方、前川主任研究員が昨年度ならびに本年度実施されたフィールド・ワークを通じて得られた結果（対象大学：本学と同規模で理系学部を持っている大学ということで、上智大学、青山学院大学、立教大学を対象とされた）を「キリスト教主義大学における他宗教対応への取り組み事例―主にイスラム教への対応について」と題した本プロジェクト研究会（2017.2.10）で発表し、出席者と意見の交換を行い、本学での応用の可能性について大きな示唆を受けることができた。

ただ、時間的な制約もあり、十分なフィールド・ワークを行えたとは言い難い面と、本課題を全学的な課題として共有すべきものとしての啓発が十分ではなかったと言わざるを得ないのが現状である。またイスラーム以外の信仰を有する方々への対応に対しては、今回は研究範囲を広げることをしなかったが、このことも視野に入れるべき重要な課題である。

世界が自国の利益や「純血性」にこだわり始め、急速に多様性に対する寛容を喪失しつつある今日、特にキリスト教主義というひとつの宗教的理念のもとに創立されている本学が常に向き合う課題として「宗教リテラシー」という主題は恒常的な研究課題であると思われ、さらなる研究とその実践に向けての取り組みを行う必要性を改めて確認しなければならないと考える。